

春彼岸廻向供養文

敬って真言教主大日如来金剛界会三十七尊
九会曼荼羅諸尊聖衆、本尊薬師瑠璃光如来、当
観音堂観世音菩薩に白して言さく。

ここ湖南の古刹・東方山安養寺は、春彼岸を
迎えて俊巖な追悼の回向供養を執り行う。

彼岸のご先祖のお墓参り、お寺参りのご先祖
とは、次々と時代は移り変わろうとも、未来永劫

かくいえ

にわたって各家の中心をなすご先祖は、不滅の
太く強い根本の柱なり。

例えば自然界を見ても、千年を越え太い樹齡の
木が、梅の花が散る。この季節になると常緑樹
の楠の葉が落ちて次の新芽を吹き出す。ところ
が、千年の樹齡の楠に成長しても、千年の葉が
今にあるわけでない。年々歳々にわたって葉は
入れ代わっている。代わりながら存続している
命が宿っている。

人間もそのように生まれては死に死んで
生まれる。

この生き死にが未来永劫にわたって続いていく。よって人間も、楠の葉も千年の樹齢には留まらない。葉自体は脆もろくて儂はかない。

新幹線の一本のレールも一本の延べ棒でできてきているわけではなく、必ず継ぎ目というものがあってこそ初めて長い長い線路が整えられている。今年の若葉にせよ、人の一生にせよ脆もろくて儂いのちない生命でありながら永遠のごとく続く大生命のなかに加えられ、今ここに生きて生かされているわけである。

このように先祖はまさに断続して家系を紡つないで継いでいる永遠の存在であり、私どもが生きていける生命の確かな柱（支柱）である故に、先祖には、大恩があるというものである。

そこで、この“ご恩”に対して、“恩返し”を、いや、“恩送り”をしなければならぬ。一般によく使われる“恩返し”とは、恩を受けただ当座の謝礼に対しての行為として使われる

ものである。ところが、この“恩送り”の場合
は、当座の“恩返し”といった少ない短期間の
ものでなく、未来永劫にわたる長い厚いご恩に
対して返し続けるという行為即ち「恩を送り続
ける」という尊い重い行為の続行を求めるもの
なり。

ご先祖はずっと遺族、子孫らを見守り続けて
おられる。昼夜わかたずで多忙を極められる。
そのご先祖への供養とはまさに“恩送り”に当
たるもので、尊い生命の連続、継続に値する。
今を生きる人間の最上の行為であると宗祖弘
法大師さまも「先祖を敬うは尊きかな」と諭さ
れている。

ひるがえ

よ

翻って楠の木を詠んだ句に「楠千年さらに
今年の若葉なり」がある。千年の永きなかに今

もろ

の今を生ききる若葉の脆い命の連続を表現し
て命の尊さがにじ味出ている。先祖に赤誠のご
恩、誠をささげ、わが身に戴くこの尊い命を再

発見して、彼の岸、彼岸におわす先祖に手を合して感謝する大切なお彼岸の期間である。

最後に仏前に乞い願いたてまつることは、安養寺住職熊谷俊亮和尚は昨春來から発症のがん治療中であるにも拘わらず明日早暁よりお四国八十八ヶ所へ修行巡拝に出発される。ご守護賜らんことを。

和尚は、お大師さまへわが身を委ねられ、既に四十年も継続された巡拝にさらに四十一回目を踏み出される。

“人生無常”の儚いなかには、永遠不変の修行として、がんが教えてくれる新たな生き方を学んでみると、病苦にひきずりまわされなくその心は躍動されている。無事成満を祈るばかり。

併せて本日ご参詣のご尊台各位の健康増進、家内安全 家門繁栄 子孫長久を祈り奉る。

平成三十一年三月二十一日

京都府向日市

亀光庵

土口哲光

敬白